

米軍と陸自「エアボーン25」で相互運用性を強化 *US, JGSDF strengthen interoperability during Airborne 25*

March 14, 2025

By Senior Airman Natalie Doan
374th Airlift Wing Public Affairs

3月4日、第36空輸中隊は、静岡県御殿場市の東富士演習場で行われた「エアボーン25」(人員降下訓練)において、陸上自衛隊第1空挺団の隊員215名を空輸した。

「エアボーン」は、米空軍と陸上自衛隊が協力して行う年次大規模演習である。今回の演習では、第36空輸中隊の乗員が米空軍のC-130Jスーパーハーキュリーズ輸送機6機を運用し、陸上自衛隊員を模擬戦闘地域へ投入する任務を行った。この訓練を通じて、有事における日米両部隊が領域を確保する能力を検証し、即応態勢の強化が図られた。

「エアボーン25」の指揮官を務めた第36空輸中隊C-130Jパイロットのザカリー・ライリー大尉は、「エアボーンは、我々と陸上自衛隊が基本的な戦術レベルで連携できる貴重な機会だ。指揮官レベルでの連携に加えて、空軍が地上部隊をどう支援できるかを実証できる演習でもある。作戦の全ての手順の精度を上げ、陸上自衛隊との連携を一層効率的にすることが重要だ」と語る。

空挺隊員の投下在先立ち、第374空輸航空団と陸上自衛隊第1空挺団のメンバーが話し合い、演習の詳細を協議した。日米の幹部が日米の運用担当が作成した訓練シナリオを確認し、脅威への対処法や任務遂行に向けた協力体制について話し合った。

ライリー大尉と第36空輸中隊のメンバーは、合同訓練から得た貴重な所見を次のように述べた。「陸上自衛隊と共に訓練することで、互いの言語や優先事項について理解を深めることができる。陸軍と空軍では視点が異なるため、その違いを認識し、効果的な解決策を見出すことが重要だ」

「エアボーン25」の実施により、第36空輸中隊と陸上自衛隊第1空挺団が連携が更に強化された。日米両軍は今後も相互運用性の向上に努め、「エアボーン」のような訓練を通じ、インド太平洋地域の平和と安定の維持に貢献していく。

